

カトリック神学と経済学

——金融危機と教皇の新しい回勅——

ハンス・ヨアヒム・ペピン

この七月四日に発表されたベネディクト一六世の回勅は現代社会の問題全般を扱っているが、私はその内の経済に関する部分に注目する。

教皇の現在の金融危機、国連の意義、モダン国家の消えつつある主権、補完性原理、世界統一政府いわゆる世界権威に関する発言を詳しく分析する。結果として、次のような印象を受けざるを得ない。つまり、ヴァチカンは大きな世界政治やグローバルな金融政策と深いつながりがある。

主権論における

“日本の系譜”の可能性について

田中 悟

本報告は、「国家とは何か」という問いを媒介として、人文科学と社会科学との間を架橋しようとする試みの一つである。その際に本論が手がかりとするのが、ヨーロッパ政治思想史に起源を持つ「主権」概念である。その意味するところを検討し

た上で、日本中世への適用可能性を探り、最終的には、「主権」をキーワードにして、前近代と近代とを貫く「日本政治思想の系譜」の可能性を提示してみたい。

主権概念は、時代状況に応じて多様な内実が与えられてきた。そもそも、宗教改革に始まる一連の変動の過程において、近代国家が得たものこそ、主権に他ならなかった。かくして成立した「主権国家」における「主権」とは、〈最高性〉と〈絶対性〉とをその重要な属性とし、法を超越して万事をなしうる無限定性をその特徴とするのである。そのような近代主権国家の概念は、カール・シュミットが近代的国家概念の成立の前提として教皇全権概念に基づく教会組織の改革の存在を指摘しているように、神学的精神の刻印を帯び、神学的思考によって体系化されたものであることが指摘されている。

ここで注目したいのは、近代国家が有するとされる「主権」概念が、ローマカトリック教会やその秩序のもとに世界を支配する神聖ローマ帝国との対決の過程で導き出されたものでありつつ、「全能の唯一神」という神学的思考から導き出された宗教的概念をその根に持つ点である。全能にして秩序や法を定める超越者としての権能は、近代以前であれば、超越者としての神に属するものであり、世俗世界の側には属し得なかったのである。とすれば、「主権国家の成立」とは、概念そのものの成立ではなく、超越に属するものであった「全能」概念が、世俗へと移動したことを意味したことになる。とすれば、ヨーロッパにおける主権概念の誕生・主権国家の成立という歴史的事件は、神と人間とを含む世界全体の認識のあり方に関わるものと

第11部会

して論じられるべきであり、「超越と世俗とをめぐる宗教的世界観の変遷」の一局面として把握することが可能だと考えられるのである。

こうした観点から日本の前近代に目を移してみると、注目されるのは佐藤弘夫の研究である。佐藤はまず「神」概念の時代的な変容と、仏教と神々との全面的な習合とを指摘する。そして、本地垂迹説に注目することで、中世日本の神国思想が、仏教のコスモロジーの下で仏が神として垂迹する末法辺土の「神国日本」と、世俗の認識を超えた彼岸／他界／普遍とが結びつけられて「世界」を構成するものであることを見出す。その意味で中世神国思想とは、トランスナショナルな仏教的普遍世界の下に、世俗的でナショナルな「神国日本」を位置づけるものであった。したがって、そのような普遍的超越もしくは彼岸世界の絶対性・最高性が失われることこそ、中世という時代の転換を意味することになる。

いっぽうで、近代的な神国思想に基づく近代国体論の研究によつて照射される範囲は、しばしば近世にとどまり、中世まで及ぶことは少ない。逆に、中世日本からなされる思想史的研究の照射範囲も、いくつかが注目すべき研究はあるにせよ、しばしば近世以前にとどまり、近代にまで及ぶことは少ない。したがって、中世日本社会の諸相が日本近代へとどのように受け継がれ、いかなる連続と断絶において関係づけられるのか。さらに、近代のウェスタンインパクトと、前近代と近代を貫く日本思想史の系譜とが、近代においてどのような関わり合いを持ちつつ、近代日本国家を作り上げたのか。そのような論点につい

ては、未開拓の領域が未だ多く残されている。そうした研究領域を開拓するに当たっては、政治学的な主権論を「超越と世俗とをめぐる宗教的世界観」の問題として捉えかえしていくという、本論で検討してきた認識視座が、ひとつの示唆となるのではないだろうか。

チベットに伝わった

スマーガダー・アヴァダーナ

梶 濱 亮 俊

チベットから出版された著書に、サキヤパンディタ（二一八二—一二五二）が著作した『サキヤ・レクシエ』がある。この注釈書にマルトン・チオゲエル（二三世紀）が著作した『サキヤ・レクシエの注釈書』がある。本書は、『薩迦格言及注釈』として西藏人民出版社（一九九〇年六月）から出版されている。本書の第二番目の格言の偈頌は、サキヤパンディタが著作した『サキヤ・レクシエ』の第一番目の偈頌が転載されたものである。この偈頌を和訳すると次のようになる。

賢い人は、いくら知識の蔵を持っていても

さらに、貴重な格言を収集する。

大海は、水の蔵であるがために、

すべての川の水が流れ込んでくる。

『サキヤ・レクシエの注釈書』の中で、サキヤパンディタの